

想 い



理事 高橋 八映

「園長先生大変です。」運動会を間近に控え猛練習の真只中、職員が外から大慌てで飛び込んできた。「すみません。公園の近くの農家の方から、『朝から音楽がうるさい。いい加減にしろ!』と怒鳴られました」と。心配する職員を後に、先ずは先方の家に…。広い庭の奥に玄関が見える。恐る恐る庭先に立つと縁台におばあちゃんが一人、ニコニコしながら手招きしている。オヤ!

「大変申し訳ございません。気をつけてはいたのですが、やはりうるさいですね。」

「あっ、そんな事はいいのいいの。子どもは元気が何よりですよ。」

どうなっているのだ、話が違う。まず「ここにおすわり」から始まって、古き良き時代の話が続く。ワンルームマンションが隣に出来、夜遅く迄人の出入りが絶えず眠れない。反対側の駐車場も深夜まで騒々しいと、おばあちゃんの繰り言はとどまる所を知らない。そして最後に「淋しいから時々遊びに来てね」と、じゃが芋のお土産まで頂いた。(一体私は何しに来たのだろう?)

最近、近隣とのこうしたトラブルをよく聞く様になった。近くの保育園では、やはり「うるさい」と叱られ、「子ども達が騒がしくてすみません」と謝ったら、「職員の声がうるさい」と言われたとか。笑えるようで笑えない話もある。

他方、新しく保育園を建築したところ、住民から防音壁を要求され、特別出費で大変だったとか。子どもの声がうるさいから保育園に土地を貸さない。こうした話も聞こえてくる。子どもは国の宝ではないのか…。自分達の小さな頃、あんなに楽しかった公園、遊具なんて何もなくても皆で遊びを考えだして夕暮れまで楽しく遊んでいた。そんな思い出はもう大人の心の中には残っていないのだろうか。

保育園の前の二軒のお宅。一つの家のおばあちゃんは保育園にとっても厳しい。ボールが庭に入ったりしたら、なかなか取らせてもらえないし、屋上のシェードが風ではためけば音がうるさいと電話がかかる。もう一軒のおばあちゃんは保育園大歓迎。「うるさくてすみません」と園の祝い菓子等持参すると、「子どもの声はとても元気をもらえるのよ、保育園の隣で良かったわ。」と、喜んでくださる。同じ子どもの声。嫌だうるさいと思えば毎日不愉快だろう。楽しい愛らしいと思えば、一日が愉快で楽しい日となりはしないか。自分の思い次第で一日が変わるのに、等と言ったら叱られるだろうか…。

練馬大根で有名な練馬区は、もともと農家が多く緑も多い、鍵などかけずにのんびりと暮らせる土地柄だった。近年交通網が発達し、人口71万人超の大都市になった。マンションが次々と出来、世代交代で農地は次々と駐車場になった。その中に埋もれるように昔からの農家がそこだけ別世界のように残り、お年寄り時代の変化について行けず、孤独になっている。本当は子どもの姿も声も喜ばしく楽しく思っていた人達を、子どもの声がうるさいと言わせてしまうまでに追い詰めてしまったものは何なのか。それを改善しない限り、子ども達は心から伸び伸びと育つ事が出来ないのではないだろうか。少子化だから育児支援に力を入れる。もちろん大切。でもそれと同時に、子どもを慈しみ育てる地域の育成、お年寄りや傷ついた人達への心配りを忘れてはいけないと思う。

これを書いている側で、子ども達が何やら騒いでいる。興味に駆られ顔を出してみると、保育園の前の工事現場でドローンが飛んでいる。子ども達はもう夢中。

「何してるのかなあ」と子ども。

「お仕事でしょ」と保育士。

「ううん違うよ。おじさん達、お仕事疲れたからドローン飛ばして遊んでるんだよ。」

子ども達を喜ばそうとドローンを余計に巡回させてくれていた作業員さん、今の話を聞いたらどんな顔をするだろう。

私の大好きな子ども達は今日も元気一杯幸せそうである。